

もくねじ 海野十三

或る日、このごみ捨て場に、舎宅の子供たちが三四人で遊びに来た。汚いところだが、子供たちには、たいへん興味のある遊び場であるらしい。子供たちは、みんな女の子であった。ごみの山の上を、上ったり下りたりして遊んでいるうちに、一人の鼻たらしの七つ位の子供が、ふとぼくを見つけて、小さな掌上へ拾い上げた。

「いいものがあつたわ。これは、きたないけれど、ねじ釘でしょう。お家へ持ってかえって、お母さんあげるわ。額をかけるのに釘が欲しいってお母さんいつていたのよ」

ぼくは、その子供の小さい手に握られていた。そして身体がぽかぽかと温くなった。

「どれ、見せてごらん」

別の子供がやって来た。ぼくの主人は、小さな掌をひらいた。すると相手が大きな声を出

した。

「まあ、きたないねじ釘ね。その青いものは毒なのよ。そんなものを持っていると手が腐るから捨てちゃいなさい」

「まあ……」

ぼくは、ぽいと捨てられてしまった。そこは所内の通路の上で、雨ふりの日のために、舗装道路になっていた。ぼくは赤面した。もう何も考えまい。

ぼくは目をつぶって死んだようになっていた。が、最後にりっぱな人に拾い上げられた。それはこの放送所の所長さんであった。どうしてこの小さいぼくが見付かったんであろうか。所長さんは、日向に立ち留って、ぼくを摘みあげ、つくづくと見ていた。

「やれやれ可哀想に、このもくねじは……。生まれながらの出来損いじゃな。ここへ捨てられるまでは、さぞ悲しい目に会ったことじゃろう。おい、もくねじさん。お前はそのままじ

や、どうにもうだつが上らないよ。だからもう一度生れ変わってくることだね。真鍮の屑金として、もう一度製錬所へ帰って坩堝の中でお仲間と一緒に身体を溶かすのだよ。そしてこの次は、りっぱなもくねじになって生れておいで」

所長さんのやさしい言葉に、ぼくは胸がつまって、泣けて泣けて仕方がなかった。さすがに技術で苦勞した所長さんだ。ぼくのような出来損いのもくねじの人生を考えてくださる、この情け深い所長さんの言葉によって、ぼくはこれまでの身を切られるようなつらいことを、一遍に忘れてしまった。ああよかった。やがて所長さんは建物の中に入って、ぼくを木箱の中にぽとんと入れた。その箱には「屑金入れ」と札がかかっていた。